

記者資料提供（令和2年1月14日）
市長室広報戦略部広報課 岩城・大橋
TEL：078-322-5085（内線2202）
Email：kouhoukikaku@office.city.kobe.lg.jp

神戸市の若者のエピソードをもとに、等身大の神戸の魅力を伝えるショートフィルム

「僕たちは震災を知らない」

震災前後に神戸で生まれた25歳の若者が紡ぐ絆の物語

令和2年1月14日(火)公開

YouTube 動画 URL <https://youtu.be/4NuSRodB7RA>

神戸にゆかりのある25歳前後(23歳～26歳)の若者を対象とした同窓会プロジェクト「BE KOBE #25(ビーコウベ ニジウゴ)」をきっかけに、25歳前後の世代が主演となって、神戸市の魅力を等身大で伝えるショートフィルムを制作いたしました。阪神・淡路大震災から25年の節目を迎えることを契機として、令和2年1月14日(火)から、インターネットを通じて公開いたします。



僕たちは震災を知らない



ショートフィルムは「大切な人との絆」をテーマに、神戸にゆかりのある若者のエピソードを紡いでストーリー化。昨年末の12月28日に開催された同窓会イベントの様子を撮影し、実際のシーンとして使用、等身大の神戸の魅力を発信することを目指しました。

復興とともに歩んできた世代に向け、いまある神戸の街並みや、友人や家族との交流を通じて、「当たり前のありがたさ」を感じていただきたいと思います。

ショートフィルム概要

- ◆ タイトル 「僕たちは震災を知らない」
- ◆ 公開日 令和2年1月14日(火)
- ◆ 公開先 <https://youtu.be/4NuSRodB7RA>

◆ ストーリー

震災の年に神戸で生まれた、若者たちの物語。主人公は晴海。遠距離恋愛中の恋人、陸とすれ違い、仕事や日々に悩んでいた。そんな中、友人の爽・司とともに神戸市の同窓会に行くことになり、久しぶりに陸とも再会する。そこで陸や友人たちの想いに触れることになり…。

若者たちは震災を通じて何を学び、どう向き合っているのか。震災25年を迎える神戸で、25歳の若者たちが同世代や親世代の想いに触れ、大切なことを見つけていく。

出 演: 梶原みなみ・井神峻太・大野佑紀奈・梶良太

主題歌: 「この街の歌」

◆ 作品の見どころ

神戸出身の若手俳優を起用

神戸市出身の若手俳優2名を起用し、神戸の若者が自然に物語に入り込める演技を目指しました。

現在の神戸の街並みを、さりげなく魅力的に描き出す

神戸の若者から、思い出の場所や景色を聞いて、撮影場所をピックアップ。美しい神戸の街並みを舞台に、冬の神戸らしいシネマライクな映像に描き出しました。

実際に神戸市で開催された同窓会イベントでシーン撮影

昨年末の12月28日に開催された同窓会イベントにショートフィルムのカメラが入り、実際のイベント参加者である神戸の若者たちとの交流のシーンを撮影しました。

◆ ショートフィルム制作にかけた想い

阪神・淡路大震災から25年の節目にあたって、“25年目の神戸だからこそ発信できるメッセージがあるのではないか”という想いから、このショートフィルム制作が始まりました。

主人公は、震災前後に神戸で生まれた25歳の女性、晴海。その晴海を中心とした、25歳の若者4人の絆の物語です。制作に際し、大事にしたのは“25歳のリアル”。それは“震災のことを直接には記憶していない”ということでした。

彼らの多くは、親や周囲から震災のことを伝え聞き、実体験とは距離がある状態で震災と向き合ってきた世代です。しかし、当事者にヒアリングを重ねていき見えてきたのは、彼らには彼らなりの向き合い方があるということ。

それは、日常生活の中にある「当たり前のありがたさ」に向き合い日々を生きていくことではないでしょうか。あの日から25年を迎える神戸市は、前を、そして未来を見えています。だからこそ一人でも多く、未来を担う若者達にこのショートフィルムが届くことを願っています。

◆ 出演者コメント



梶原 みなみ : 神戸市生まれ、神戸市育ち／湊 晴海 役

ショートフィルムについてのコメント:

生まれ育った神戸での撮影は、見慣れた景色も特別に感じられ、とても幸せでした。昨年の1月17日に、神戸で毎年開催されている追悼行事を、東京にも中継して関東圏の被災者も参加できる催しがありました。私も参加しましたが、初めての試みだったようで、関わっている人たちが試行錯誤して作りあげていました。その姿を見て「伝えるってこういうことなんだ」と感じ、私も自分なりの方法で試行錯誤して、地道に伝えていくことをやっていきたいと思いました。



井神 峻太 : 神戸市生まれ、神戸市育ち／藤木 陸 役

ショートフィルムについてのコメント:

自分の故郷で仕事ができる、とてもうれしいです。震災の記憶がほとんどない僕らだからこそ、震災を風化させないように、次の世代にも語り継いでいくことが必要だと思っています。神戸では、小さい頃から、家族でルミナリエに行っていました。子どもの時は父親に肩に乗せてもらい、大きくなれば友人と一緒にと、いろんな人とこの景色や思いを共有できたのは、僕の一番の思い出です。

◆ 実際に神戸市で開催された同窓会イベントの様子



ストーリーボード



主人公は、晴海(25)。

東京でデザイナーをしている
彼氏の陸とは遠距離恋愛中。



友人、爽の路上ライブを聞いている最中、
陸から「週末の同窓会、神戸帰れそう」
との連絡が。
しかし、晴海の表情は晴れない。



同じ頃、陸はアトリエで
何かの制作に没頭していた…。



晴海と陸のメッセージは続く。
陸の「東京で充実している」との一言に、
「私がいなくても、楽しそう」と
晴海の本音が漏れる。



陸は「そんなことないよ！」と否定し
「今っておきの作品をつくっている」
との報告をする。



その報告にも晴海は
「近くにいたら、すぐ見れたのかな」と
遠距離恋愛への弱音を吐く。



寂しさや不安が募る帰り道、
友人の爽と司が晴海を見かけ、
声をかける。



ビストロに移動した3人。
晴海を心配した爽が、近況を探るものの
強がった晴海は本音を言うことはない。

そんな時、ふとテレビから
「神戸が震災 25 年を迎える」との報道が流れる。
しかし3人は興味を示さない。



すぐに爽が、週末の同窓会へと
話題を切り替える。
晴海は相変わらず、曇った表情のままだ。



数日後、爽と司は、
とある準備のためにふたりで落ち合っていた。
晴海の心境を案じつつ、
神戸の街並みを見ながら司が語り出す。



「震災 25 年なんて実感湧かない。」
「この街があるのは実はすごいことなのかも」と。
それに対して、いつも通りふざける爽だが、
内心ふたりは、様々なことに
想いを馳せている様子だ。



そして迎えた、同窓会当日。



晴海は陸を探すが、姿はない。

爽と司に励まされながら
会は進んでいく。



会も終盤に差し掛かった時、
晴海に陸から電話がかかってくる。
「観覧車のところに来てほしい」
と呼び出された晴海は、会場を駆け出していく。



観覧車の前には、陸が待っていた。

見てほしいものがあると
晴海を椅子に座らせる。



そして、赤い布をめくり、
プレゼントを晴海に披露する。
そこには晴海の幼少期の写真と
生まれ育った神戸の街並みがあったのだ。



すべてを悟った晴海は
涙が溢れ出す。

陸は、おもむろに語りはじめる。



神戸にしばらく帰れず、
晴海を寂しくさせてしまった後悔、
だから、プレゼントをつくったということ。



プレゼントをつくるため、
陸は晴海の実家にも訪れていた。



晴海の実家のアルバムには
「震災で大変な年だったのに元気に育ってくれた」と
晴海への親からのメッセージが。
陸は、この想いを受け取り、
次は自分がちゃんと大事にする、と決意をする。



晴海は、そんな陸の言葉に
涙が止まらない。



そして、爽と司のふたりも
このプレゼント計画に
協力していたことが明かされる。
晴海のことをずっと心配していたのだ。



「寂しくさせてごめん」と晴海に寄り添う陸。
晴海は葛藤を打ち明ける。
ふたりの絆は再確認され、強いものとなった。



数ヶ月後、
爽の路上ライブ。



そこには、幸せそうに肩を寄せ合う
晴海と陸がいた。



最後に、晴海が語る。
「僕たちは震災を知らない。
だけど大切な人といられる今日が
どれだけ幸せなことか。
それだけは、たしかに知っている」と。